

煉瓦工場で毎日働くようになり、今迄力仕事などしたことのない身に、モッコ担ぎ等辛い日々を過しました。

幸にも食パンの配給は私達だけは白パンでした。これはゲーペーウの将校が夫婦で二階を接収していたので寛大な処置をしてくれたのだと思ひ感謝していました。

夫と二人で二十有余年社宅暮しだったが、家具や特に寒いので夜具には金をかけて作り置いたのを置いて命からがら逃げ、夢にまで見続けて来た日本の土を昭和二十二年七月十七日函館に上陸、税関で兎の毛皮でチョッキでもつくろうとしてこれ一枚しか持って来なかつたのに、無情にも取り上げられた。

義父のお蔭で助かつたので、帰る時は一緒にと励まし合つたが、病に勝てず引揚げる前二十一年三月一日樺太の土と成り、一握りの骨のみ、今、夫（平成元年四月五日没）と二人ともども藻岩山に埋葬し私を見守つていてくれます。

母の教え、情けは人の為ならず

北海道 中嶋 富美

私は昭和二十年四月、樺太泊居女学校に入学し親元を離れ下宿をして学校に通っていた。

昭和二十年八月、ソ連軍の突然の侵攻で全員親元に帰ることとなった。

久春内は西海岸の終着駅で、避難して南下して来る人、肉親の安否を気遣つて北上する人、喧騒騒然、蜂の巣を突いたような騒ぎであった。

空襲のサイレンで、久春内郵便局に勤めていた姉と私と兄の長男七歳と、防空壕に逃げ込んだ、あとから母がオニギリを持って来てくれたが、とう／＼空襲解除にならず一夜を明かした。

翌日恐る々々家に戻って見ると、三十人余りの避難して来た人達が朝食を作つて食べていた、風呂に入っている人もいた。

母は腰を抜かさなければ「アリヤマー」と言ったきり暫くは、二の句が出ない有様。

皆はこの住人は逃げて行つて空き家かと思つて一夜の宿をさせて貰つたと言つていた、母は困つた時はお互様と、私の家にいる分には「腹は減つては戦いになりませんヨ」と言つて食事の心配はかけませんけれど、おかずはこれだけですと、漬物を出して気持よく食べさせていました。

家の廻りには母が六反歩ほどの島に自家用の野菜を作り、終着駅であるためここより北上する人達の馬宿をやりながら、家畜も牛四頭、豚三十頭くらい、鶏などを飼い、母屋は二階建に続いて牛馬の納屋もあり、村では家の大きさでは十指に入つていたようです。

父母は平時より、内地の不作による入荷減等を考え、いつも三か年分の食糧、味噌、正油等を貯えていました、それで避難民には暖かく迎え、米飯だけは腹一杯食べなさいよ、とすゝめていました。

戦争も激しくなり、軍馬の飼育のために、馬小屋は軍に接收され改造されて、軍馬四十五頭くらいいたと

思います。

父の仕事は馬五、六頭と人を雇つて造材の搬出請負でした、朝四時頃仕事に出かけ、夜は八時頃帰り、暮しはまあく々と云う家庭で、長男はマンドリン、三番目の姉は豊原師範に行つていたので、琴とオルガン、ラジオ、蓄音機等がありました。

八月十五日の終戦の詔勅もこのラジオで聞きました、敗戦となるや、朝鮮人や中国人等が、急に威張り出し、日本の軍人や警察官に報復し氣勢を上げ、治安は悪くなり、女子供は全部殺されるだろうとの噂が流れ恐怖で外出はできなかつた。

その内にソ連軍の進駐で、毎日毎日生きた心地がなくな、今日も無事だったかと明日の無事を祈る有様であつた。

長兄夫婦は久春内より北へ六キロ、宇蘭で農耕馬三頭で三十町歩を二頭引プラウ、デスクハロー、播種機、脱穀機、製粉機、発動機、いも掘機、モーターレーキ一等最先端の農機具を駆使し、作物は主に小麦、燕麦、馬鈴薯、牧草は全部家畜用で九十%くらい収穫した物

を久春内の馬小屋の二階に越冬用に格納していたが、ソ連軍により納屋、軍馬四十五頭、自家用馬七頭外家畜もろ共接収されてしまった。

父は少し足が不自由であることを理由にして、やつと馬一頭だけ返して貰い、母屋に差し掛けを造って飼っていました。

その内に治安もよくなり、元の住家に戻るように命令が出て、一人減り、二人減りと九月下旬には皆な帰って行き、世話になったお礼にと、お金を置いて行くからと、出されても母は今後どんなことがあるかも知れない、お金は命の次に大事だからと云って一切受取りませんでした、皆「こんな佛様みたいな人に助けられて」と涙を流し手をしっかり握りながら別れて行きました。

十月に入って二階が大きいからと取り上げられて、ソ連の憲兵「ゲーペーウ」の将校ニコライさんと夫人のタマラさんが入居しました、非常に良い人でした、この人が居たために、二回ほどソ連兵に銃をつきつけられて襲われましたが二階から降りて来たら一言も言

わない内に退散してしまい事なきを得ました。ニコライさんのエピソードを二ツ三ツ

一、風呂に初めて入れた時お湯を汲んでしまい風呂釜を割るところでした。そのあと日本式に入浴法を教えたところ、今度は一時間も上がって来ないので行って見ると、日本式ハラシヨ非常に良いと言って中々上がらず困りました。

二、刺身、生寿司、豆腐、納豆など日本食を食べさせたところ日本食はおいしい、時々作ってほしいと注文がありました。

三、人には無くて七癖と云う通り、素面の時は非常に良い人でも酒が入ると、ピストルを上に向けて発射するので、夫人のタマラさんは一階の我々の部屋に降りて来て姉の布団の中に入って一緒に寝たものです。

話しが前後しますが、八月十五日以降警察官は身の危険を感じてどこかへ身を隠してしまった、残った家族の惨めなこと、お金を出して買っても、なぜあんな奴に売ったのだ、と朝鮮人より仕返しが有り、売ってもやれず、母が夜、自分の畠に薯掘りに行った時、掘

らずに帰って来たので、聞くとも先客がいたので帰ったと云う、変だと思いついて見たら警察の家族が掘っていた。

母は誰にも話すなと言う。警察だつて上からの命令でやったことなのだ、家族までつらい思いをさせてはいけないのだと云つて、全部掘つて行つても、家族が助かるならば良いではないか、と言つて全く寛大なものであった、心の広い、暖かい心を持った母であった。

その内に食糧も配給となりましたが、よそは黒パンのガチ／＼だったが我が家は白パンであった。これも母が困っている人を助けたことなどが廻り廻つて、私達も安穏な生活ができたことを母に感謝したものです。

昭和二十二年五月、たしか第一回目の引揚船で、ニコライさん夫婦も見送りに来て、係に手を打つてくれたものか、大泊の港はゴツタ返していたのに、父母と私と姉と甥の五人は行列で長時間待つことなく、早々に乗船できたことは、母がいつも、朝鮮人、中国人、ソ連人などの分け隔てなく付き合ひをしたお蔭であつ

た、無事函館に上陸して母の至誠が天に通じ、神佛の守護があつたものと思うのでした。

引揚げた父は三十九年に、母は五十四年に亡くなり、今は大野町の墓地に眠つております。

私は母の真心の姿を見て生きてきました、いつの日か社会の皆さんに少しでもご恩返しができることを考えながら余生を過しております。

やっぱり祖父はやられていた

北海道 松村 重博

国破れて、山河あり、私が終戦の詔勅を聞いたのは、疎開先の樺太、豊真線二股と云う小さな村であつた。

詔勅を聞きながら只遠くの山脈を見つめていた、田舎の小学校で、真岡の小学校とは異なり特別に勉強をしなくても、お寺の坊さんの息子に続いて二番目の成績だった。

詔勅の放送を聞いた翌日、母は急遽、私を迎えに来